

魚類防疫に関する技術指導と研究

(魚介類安全対策事業)

古谷尚大・清川智之・松本洋典・沖 真徳・岡本 満・福井克也

1. 目的

海面及び内水面の魚病被害軽減と魚病のまん延防止のため、魚病検査や水産用医薬品の適正使用の指導及び養魚指導・相談を行なう。

2. 方法

種苗生産、中間育成、養殖場等の生産施設を巡回し、疾病の対処法や飼育方法の指導・助言を行うとともに、各生産施設や天然水域における疾病発生時には現地調査、魚病検査により診断を行った。検査方法は、主に外観および解剖による肉眼観察、検鏡観察、細菌分離、PCR 検査等により行った。細菌が分離された場合は、対処法および水産用医薬品の適正使用について指導を行った。

モニタリング調査として、ヒラメのクドア属粘液胞子虫 (*Kudoa septempunctata*) について、農林水産省ガイドラインおよび水産庁が作成した防止対策等に従って PCR による定期的な保菌検査を実施した。さらに、ヒラメのシュードモナス症について、種苗生産施設および中間育成施設において PCR による定期的な保菌検査を行った。

なお、コイヘルペスウイルス (KHV) 病の養殖業者の定期検査については、2019 (令和元) 年7月以降は未発生水域のみを対象として行うこととしたため、今年度の検査はなかった。アユの冷水病およびエドワジエラ・イクタルリ症対策については、県外産種苗放流情報の収集と県内産人工種苗の保菌検査を実施した。

3. 結果

(1) 疾病発生状況

今年度の魚病診断件数は、海面3件、内水面6件の計9件であった。概要は次の通りである。

海面では、蓄養アワビの斃死が発生し、水産技術センターの検査では真菌が認められ、水産技術研究所の不明病診断では、ストレスによる衰弱をきっかけとした細菌と真菌の複合感染と推察された。また、カワハギの陸上養殖において斃死が認められたため、解剖して観察したところ、腸水が貯まり、腸壁が薄くなっていることが確認された。本症状はトラフグで知られる粘液胞子虫性のやせ病に類似していたが、

腸粘膜のスタンプ標本では病原体の栄養体を確認できなかった。

冬季の小型底びき網漁業で死んだアカアマダイがまとまって漁獲されたが、外観並びに剖検では明らかな異常が認められなかった。なお、過去にも約10年ごとに同様の現象が起こっており、アカアマダイが生息する海底への冷水塊の侵入が原因と疑われている。

内水面では、1月に江津市のアユ種苗生産施設で育成中のアユ種苗にて斃死が発生したため、冷水病、エドワジエラ症、異型細胞性鰓病を対象としたPCR検査のほか、細菌培養法による検査を実施した。PCR検査はすべて陰性だったが、TCBS 培地に黄色のコロニーが確認され、ビブリオ病と診断した。このほか飯南町の個人池において斃死したコイのPCR検査を実施し、KHV病による死亡と診断した。

(2) モニタリング調査

ヒラメの県内の種苗生産、中間育成施設を対象に種苗搬出前(3月)および放流前(5月)において実施したPCRによる保菌検査で、*K. Septempunctata* (計120検体)、シュードモナス症(計10検体)ともに全て陰性であることを確認した。

アユの冷水病およびエドワジエラ・イクタルリ症の保菌検査(30件840尾)では、全て陰性であることを確認した。

なお、疾病発生・診断状況の詳細は、添付資料に記載した。